

第1回神戸歴史遺産認定概要書



ろっこうけーぶるろっこうさんじょうえき
六甲ケーブル六甲山上駅

所在地 : 神戸市灘区六甲山町一ヶ谷1番32号

員数 : RC造地上3階地下2階建物1棟

所有者 : 六甲山観光株式会社 代表取締役社長 宮西幸治

概要

昭和7年3月10日の六甲ケーブル開通以来、六甲山上駅の駅舎として使用されてきた建造物である。地下2階、地上3階の鉄筋コンクリート造で、アール・デコ風の装飾が施されている。玄関両脇の丸い窓や直線デザインの階段腰壁を円形で抜いた装飾、照明器具等、昭和初期のモダンなデザインが随所にみられる。玄関ポーチは扇形で、底を支える玄関柱は角柱と円柱で対比させるなどの造形が特徴的である。

地下1階には、開業当初から使用しているケーブルカーシステムの心臓部である巻上機がある。また、関西唯一となったケーブルカーを手動操作する運転室やオープンフレーム方式の変電所が設置されており、機械室を駅舎地下に取り込んだ施設の様子が残っている。

六甲山上駅は、六甲ケーブルの開通以来、六甲山観光の玄関口として、また、六甲山に住む住民の交通の拠点として、多くの人に利用されてきた。昭和13年の阪神大水害や戦争による営業休止を乗り越え、神戸の観光地、六甲山のシンボリック的存在となっている。平成19年には、近代化産業遺産認定を受けている。

所見

昭和7年の開業当時に流行していたアール・デコ風の建築様式を取り込んだモダンなデザインで、六甲山ホテルなどとともに、昭和初期の山上のハイカラなレジャー文化を感じられる現存建物として貴重な存在である。

六甲山は、明治時代以降、駐在外国人のリゾート地、関西実業家の別荘地として観光開発され、現在に至るまで都市近郊の山として親しまれてきた。そのアクセスを容易にした六甲ケーブルと、六甲山観光の玄関口として六甲山上駅の果たしてきた役割は大きい。

平成13年には、六甲ケーブルが灘区民の投票による「灘百選」に選ばれ、灘区の魅力的な資源として地域住民から親しまれている。

神戸の歴史を物語る遺産であり、今後も継承し、活用していきたいという所有者の考えがあることから、神戸歴史遺産としてふさわしい。



六甲ケーブル六甲山上駅位置図



六甲ケーブル六甲山上駅 現況



1階階段



1階玄関の造形



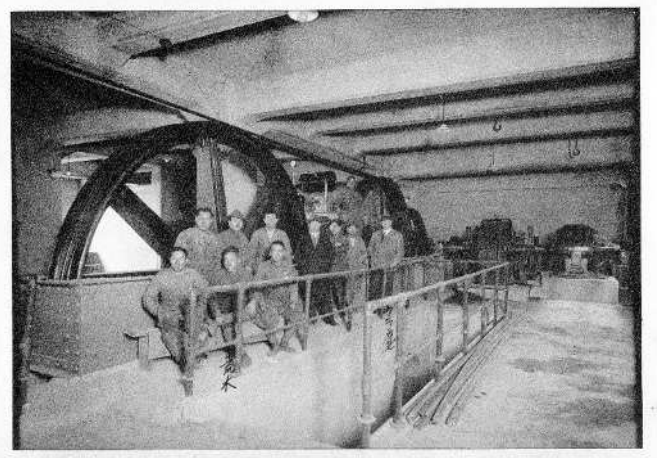
地下手動操作運転室



地下巻上げ機



開業当初の様子



開業当初の巻上げ機の様子

ゆな きげん ありまげいこぶんか 湯女を起源とする有馬芸妓文化

所在地 : 神戸市北区有馬町 790 番地の 3

員数 : 1 件

保存関係者 : 有馬伝統文化振興会 代表 風早和喜

概要

日本有数の古湯である有馬温泉には、江戸時代の湯女の湯治客へのおもてなしの文化が現在の有馬芸妓に引き継がれている。

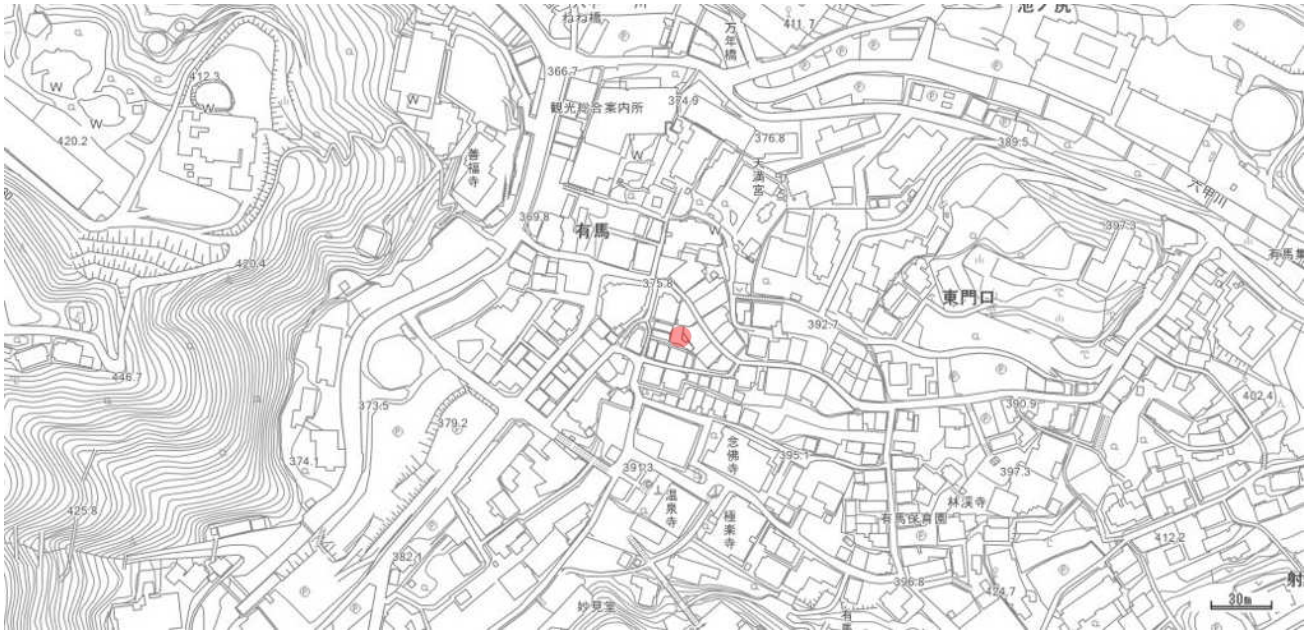
江戸時代には、外湯が一か所しかなく、湯女は宿坊からこの湯屋に湯治客を案内していた。湯屋は四坪と狭く、限られた入浴時間の中で、湯女が大量の湯治客を順次入れ替える役目を担っていた。さらに湯治客の近傍名所へ案内や、夕食の場で唄や踊りを披露している。唄のなかでも有馬節ありまぶしは当時のはやり歌として全国に広がり、浄瑠璃や歌舞伎にも取り上げられている。湯女は、湯治客にとっては欠かすことのできない存在であったと言える。

明治時代に湯屋が建て替えられ広くなったため、湯女が行っていた入浴の案内は必要なくなったが、唄や踊りは、有馬芸妓に引き継がれていった。江戸時代から続く有馬節や、毎年1月2日の入初式いりぞめしき（神戸市地域無形民俗文化財）の湯女の踊りや唄（有馬湯女節）は、その代表的なものである。さらに世相を反映して有馬を題材とした新しい唄もつくられていった。

現在も、有馬芸妓は昭和初期には確認できる置屋おきやに属し、検番けんばんを通じて芸妓文化を伝える一方、有馬での年中行事も支えている。さらに近年は、積極的に芸妓文化の発信にも努めている。

所見

有馬温泉は、飛鳥時代から湯治場としての記録が見え、現在は全国あるいは国外から多くの観光客が訪れる神戸市を代表する観光地の一つである。幾度となく災害を被ったが、その度に温泉を中心に復興し現在に至っている。有馬芸妓は湯女を起源とし、温泉街の歴史的な変遷を文化として体現している貴重な存在であると言える。今後もその文化を継承する意欲もあり、有馬温泉街での期待も高く、応援を受けていることから、神戸歴史遺産とすることがふさわしい。



有馬検番位置図



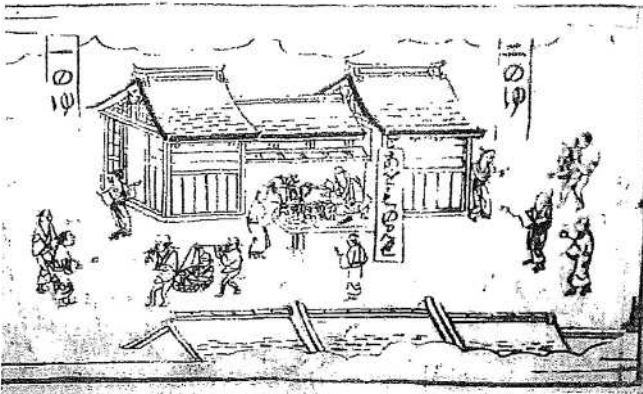
有馬芸妓



浴衣会（昭和33年）



入初式に向かう行列（昭和36年頃）



「一の湯・二の湯」『増補有馬手引草』1717



「小湯女有馬ぶしを舞ふ図」『滑稽有馬紀行』1827



「撮州有馬湯女」春芝画 江戸時代後期

"IRIZOMESHIKI"
(The New Year's Bath Ceremony)

有馬温泉
馬
有温

神戸市地域無形民俗文化財

1月2日(金)

時間 10時40分頃
会場 有馬小学校講堂

温泉寺出発(10時)
練行列
入初式(10時40分頃 有馬小学校講堂)
戻せ・返せ(観光案内所前)
温泉寺着(12時30分頃)

この「有馬温泉入初式」は、江戸時代から続いてきたもので、有馬温泉を象徴する「馬」の文字を、少子化が進む有馬温泉に再興させた元々である「馬」を、この「馬」の文字を、馬と温泉の縁起をかねて行っている。また、有馬の温泉を象徴する「馬」の文字を、馬と温泉の縁起をかねて行っている。

主催/(社)有馬温泉観光協会 問い合わせ/有馬温泉観光協会案内所 ☎(078)904-0708

入初式ポスター

「たけいけもんじょ武井家文書」および「たけいけでんらいかいがしりょう武井家伝来絵画資料ふんぼん（粉本）」

所在地： 神戸市須磨区板宿町 2 丁目 2 -1 （百耕資料館）

員数： 武井家文書：10677 点（枝番あり）、武井家伝来絵画資料（粉本）：2000 点

所有者： 一般財団法人 武井報効会 代表理事 武井宏之

概要

現在の須磨区板宿町の旧家武井家に伝来した資料群であり、現在は昭和 62 年（1987）に同家が設立し、翌年に開館された百耕資料館ひゃっこうしりょうかんで所蔵され、一般財団法人武井報効会たけいほうこうかいが管理運営している。なお、武井家は、江戸時代までは武貞姓を名乗っており、江戸時代には庄屋・惣代庄屋であり、明治時代以降には須磨町長など地域行政の代表者を輩出した家柄である。

「武井家文書」は、近世から近代にかけての古文書群であり、主に 18 世紀半ば以降の土地・年貢・戸口・支配・村政・宗教・訴訟などに関する文書と明治時代から戦前までの行政史料及び名望家であった武井家の生業や文化活動などに係わる文書や書状などで構成されている。「武井家伝来絵画資料（粉本）」は、明治時代から大正時代の当主・武井伊右衛門たけい い えもんが収集し、以後同家に伝わった、本画作成のための画稿・下絵、古画の模写、写生帖といった絵画資料群である。絵画資料の大半は、伊右衛門が師事していた兵庫在住の絵師である岡田おかだ廣章ひろあきの旧蔵品であり、彼が作画の過程で収集・作成したものと考えられ、地方絵師がどのように絵画を学び、作成したかを伝える資料である。

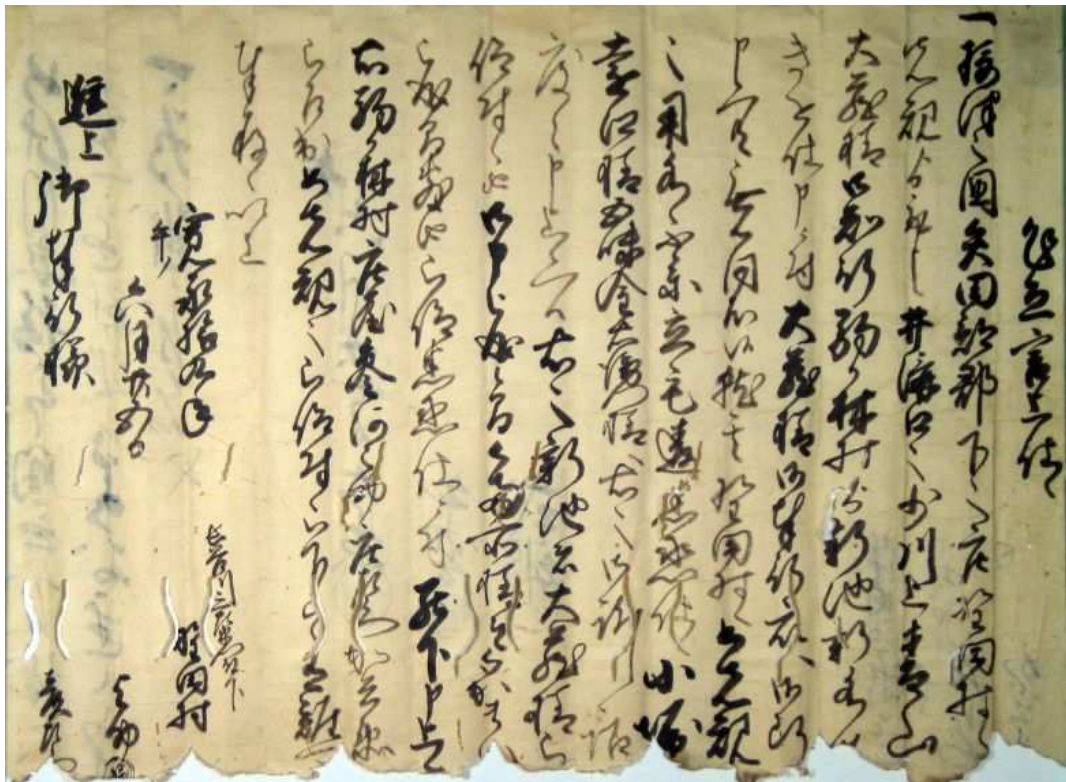
これらの資料群は、百耕資料館において保存・調査・研究が行われ、その成果は、同館の常設展示・企画展示等を通じて発信されている。

所見

「武井家文書」は、近世の神戸市域の村落の実態と、近代の地域社会の動向と名望家の文化的活動の様子を克明に伝える文書及び絵図などで構成された資料群である。「武井家伝来絵画資料（粉本）」は、絵画資料としてだけではなく、粉本を通して神戸市域に住んだ地方絵師の絵画制作の過程について触れることができる数少ない資料として貴重である。名望家であった武井家が継承してきたこれらの資料は、須磨区のみならず、神戸市の歴史を語る上で欠かせない。今後も百耕資料館で保存し、活用されることも明らかであり、神戸歴史遺産としてふさわしい。



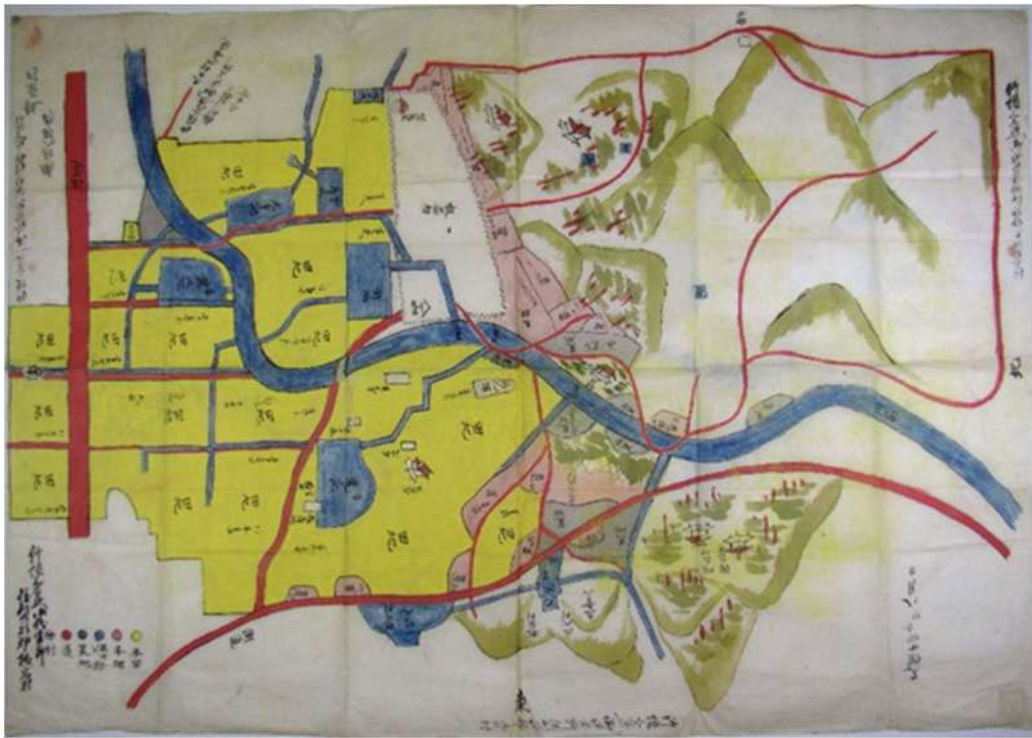
百耕資料館位置図



野田村・駒ヶ林村水論につき言上書

寛永19年(1642)

百耕資料館所蔵



板宿村絵図 天保14年(1844) 百耕資料館所蔵



木槿狗子図 (原作者: 円山応挙)
百耕資料館所蔵



孔雀図 (原作者: 室田〈斎藤〉霞亭)
百耕資料館所蔵

あんとかくていだいりあとでんせつち
安徳帝内裏跡伝説地

所在地 : 神戸市須磨区一ノ谷町2丁目74-2 (約250 m²)

員数 : 1件

管理者 : 一の谷史跡保存会 代表 内田啓子

概要

源平合戦にまつわる名所として一の谷に安徳帝内裏があったとの伝説が生まれ、現在に伝わっている。

安徳帝内裏跡伝説地が確認できる最も古い文献は、寛文7年(1667)に作成された『撰津名所地図』で、一の谷と二の谷の間に安徳帝内裏跡との記載があり、その位置が現在の一ノ谷町2丁目付近であったと推定できる。その後、名所記や錦絵などの資料に内裏跡が描かれ、一の谷に安徳帝内裏跡が存在したという伝説が江戸時代には一般的に認識されていたようである。それを示すように須磨を訪れた松尾芭蕉も紀行文『笈の小文』の中で内裏跡を見たと記している。

明治時代以降、伝説地周辺は次第に宅地化し、現在伝説地は公園となっている。敷地内には、安徳宮、眞理胡辨財天まりこべんざいてん、稲荷社、灯籠、「安徳帝内裏跡伝説地」の石碑、玉垣の一部が存在している。灯籠は「モルガン灯籠」と呼ばれており、近隣に住んでいたアメリカの大富豪モルガン氏の妻ユキが明治44年に寄進したものである。また、石碑は紀年銘から大正10年に建立されたものとわかる。敷地内のこれらの建造物からは、地域の歴史や地域住民による伝説地の保全の歩みが窺える。また、ウォークラリーのチェックポイントや、近隣の小学校の生徒たちの地域学習の場としても利用されている。

所見

江戸時代には多くの名所記などにも紹介され、今日まで源平合戦にまつわる場所として広く認識されている。また、申請範囲に存在する建造物から、明治時代には地域住民による保全が始まり、現在に至っている。少なくとも300年以上前から神戸の歴史的資源として継承されてきたことが明らかである。

さらに地域住民を中心にして「一の谷史跡保存会」が結成され、保全活動だけではなく、今後は伝説地を地域の歴史を伝えるものとして活用を行っていく意思も示されている。

以上のことから神戸歴史遺産としてふさわしい。



安徳帝内裏跡伝説地範囲図（赤塗が認定範囲）



安徳帝内裏跡



安徳帝内裏跡伝説地石碑



安徳宮



モルガン灯籠 (モルガンユキが寄進)



眞理胡弁財天

みやのおじんじゃ ししまい
宮野尾神社の獅子舞

所在地 : 神戸市垂水区名谷町字梨原 2349 番 8、2366 番 9

員数 : 1 件

保存関係者 : 中山協議会 会長 藤岡隆司

概要

収穫の感謝と翌年の豊作を祈願して、宮野尾神社で毎年 10 月に実施される獅子舞である。古老の聞き取りや体験談から、戦前から大きく形を変えることなく続いていることが分かっている。名谷町中山地区は、丘陵に囲まれた福田川沿いに、耕地と集落が広がる地区で、かつては農業を主たる生業としていた。

10 月第 2 日曜日の 14 時頃に神社に集合し、お神酒で乾杯したのち祭りを開始する。

まず、中学入学直後の最年少の 2 人がヒョットコとお多福の面を被り、センマと呼ばれる踊り手として獅子舞の前座に踊りを披露する。その後、太鼓とお囃子に合わせ神社へ奉納する「基本」の獅子舞を舞う。獅子は若手二人一組で 2 匹あり、交代で踊る。

16 時頃に神社を出発し、地区内各戸で獅子が神棚をお参りする「荒神参り」を行い、「花」と呼ばれるお祝いをいただく。太鼓や笛を取り付けた「だんじり」を軽トラックに積載し、六角、提灯とともに協議会役員等の自宅を例年 3 か所訪れ、獅子舞を行う。「基本」と「芸」の踊りを披露し、夜遅くまで盛り上がる。神社に戻り、「基本」を奉納して終了する。

神社や地区の共有地を管理する中山協議会の子弟のうち 13 歳から 40 歳までの男子（以前は 15 歳から 35 歳までの男子）が獅子舞を舞う明神講を組織し、祭りを開催する。明神講では年齢に応じた役割分担があり、年長者が指導、世話係を担って獅子舞を受け継いできた。祭りの約 2 か月前から宮野尾神社で獅子舞や太鼓の練習を行っている。

所見

宮野尾神社を核とした中山地区の秋祭りの行事として、昭和初期頃からほぼ形態を変えずに獅子舞が継承されている。獅子舞のみならず、地区の若者が、獅子舞を舞う明神講を組織する体制も変わらず受け継がれている。

宅地開発が進み、かつて田畑が広がっていた地区の様子は変容しているが、その名残が収穫の感謝と豊作祈願の獅子舞として地区に息づいている。時代にあわせた日程に変更し、年齢制限を緩和するなど柔軟に工夫して続けてきており、今後も精力的に継承していきたいという考えであることから、神戸歴史遺産としてふさわしい。



宮野尾神社位置図



宮野尾神社での獅子舞



宮野尾神社での獅子舞



宮野尾神社での獅子舞



太鼓を載せ、笹を取り付けた「だんじり」